

MM023『假名古事記』上中下三冊。明治七年一月發行、東京中西忠誠／甲斐内藤傳右衛門  
坂田鐵安撰 [不許翻刻]『假名古事記』三卷 官許 中西忠誠 藏 内藤傳右衛門 版

ふることぶみなかつまき  
古事記中巻

第一 神武天皇

かむやまといはればこのみこと いろせいせのみこと ふたはしら たかちほ みや ましへ はかり いづれ ところ まさ  
神倭伊波禮毘古命。その兄五瀬命と二柱。高千穂の宮に坐て。議たまはく。何の地に坐  
バか。天下の政をバ平けくきこしめさむ。なほ東のかたにこそ行まさめとのりたま  
ひて。即日向より發して。筑紫に幸御き。故豊國の宇沙にいたりませるときに。其土人。名  
ハ宇沙都比古宇沙都比賣二人。足一騰の宮をつくりて。大御饗たてまつりき。其地より  
うつらして。竺紫の岡田の宮に。一年坐き。亦その國より上幸て。阿岐國の多祁理の宮  
に七年坐き。亦その國より。遷のぼりいでまして。吉備の高嶋の宮に八年坐き。故そ  
の國より。上り幸ますときに。龜の甲に乗て 鉤しつ。打羽舉來る人速吸門に遇き。爾  
よびよせて。汝ハ誰ぞと問しければ。僕ハ國神。名ハ宇豆毘古とまをしき。又汝ハ海つ道  
を知りやと問しければ。能知りと答曰。又從に仕奉むやと問しければ。つかへまつらむ  
とまをしき。故爾 槁機を指度して。その御船にひきいれて。槁根津日子と號名をたまひき。  
コハヤマトノクニミヤツコラガオヤナリ 此者倭國造等之祖 故その國より上り行ますときに。波速の渡を経て。青雲の白肩の津に泊  
たまひき。このとき登美能那賀須泥毘古。軍をおこして。待向て戦しかバ。御船にいれ  
たる楯をとりて。下立たまひき。故其地の號を。楯津とつけつるを。今に日下の蓼津となも云。ここ  
に登美毘古と戦ひたまふときに。五瀬命。御手に登美毘古が痛矢串を負しき。故ここに詔た  
まはく。吾ハ日の神の御子として。日に向て戦こと不良。故賤奴が痛手をなも負つる。今よりは  
も。行めぐりて。日を背負てこそ撃てめと。期たまひて。南のかたより。廻幸ときに。血沼海にい  
たりて。其御手の血を洗たまひき。故血沼海とはいふなり。其地よりめぐり幸て。紀國の男の  
水門に到まして詔たまはく。賤奴が手を負てや死なむと。男建びして崩ましぬ。故その水門  
とぞいふ。陵ハやがて紀國の竈山にあり。故神倭伊波禮毘古命。其地よりめぐり幸て。  
熊野村に到ませるときに。大なる熊やまより出で。即失ぬ。ここに神倭伊波禮毘古命。倏忽にま  
また御軍みな遠延て。伏き。このときに熊野の高倉下。横刀をもちて。天神の御子の伏るところ  
に到きて。獻之ときに。天神の御子即寤起まして。長寤しつるかもと詔たまひき。故その横刀を  
うけとりたまふときに。その熊野山の荒ぶる神。おのづから皆切付さえて。其惑伏る御軍。ことごと  
に寤起たりき。故天神の御子。その横刀を獲つるゆゑを問たまへバ。高倉下 答まをさく。己夢  
に。天照大御神高木神。二柱の神の命もちて。建御雷神をめして。詔たまはく。葦原の中國ハ。  
伊多玖佐夜藝帝阿理祁理。我御子等。不平坐して。其葦原の中國ハ。もはら汝が言向つる國な  
れば。汝建御雷神降りてよとのりたまひき。爾に 答まをさく。僕くだらずとも。もはら其國平し  
横刀あれば。可降此刀名佐士布都神云亦 名甕布都神云亦 名布都御魂此刀者石上神宮坐也此刀をくださむ狀ハ。  
高倉下が倉の項を穿て。其より墮入むとまをしたまひき故建雷神教曰 穿汝之倉頂以此刀墮入  
故阿佐米余玖汝とりもちて。天神の御子にたてまつれとまをしたまひき。故夢の教のままに。且  
て己が倉を見しかバ。信に横刀ハ 獻にこそとまをしき。ここに亦高木大神の命もちて。さとしま  
をしたまはく。天神の御子。此より奥つ方に莫使入幸そ。荒ぶる神甚多かり。今天より。八咫鳥を  
遣せむ。故その八咫鳥道引てむ。其立む後より幸行べしとさとしまをしたまひき。故其みさとしのま

にまに。其八咫鳥の後より幸行しかば。吉野河の河尻にいたりましき。ときに筥を作て。魚取人ありき。ここに天神の御子。汝ハ誰ぞと問しければ。僕ハ國神。名ハ鬻持の子とまをしき。此者阿陀鸕養之祖。其地より幸行バ。尾ある人。井より出來。その井光れり。汝ハ誰ぞと問せば。僕ハ國神。名ハ井氷鹿とまをしき。此者吉野首等祖也。かくて其山に入ましかば。亦尾ある人過り。この人。巖を押わけて出來。汝ハ誰ぞと問せば。僕ハ國神。名ハ石押分の子。今天神の御子幸行ときけるゆゑに。參向へまつるにこそとまをしき。此者吉野國樂之祖。其地より蹈穿越て。宇陀に幸き。故宇陀の穿といふ。故ここに宇陀に。兄宇迦斯弟宇迦斯と二人ありけり。故先八咫鳥をつかはして。二人に問しめたまはく。今天神の御子幸行り。汝等仕奉むや。ここに兄宇迦斯。鳴鏑をもちて。其使を待射かへしき。故その鳴鏑の落たりし地を。訶夫羅前といふ。待撃むと云て。軍を聚しかども。得あつめざりしかば。仕奉むといつはりて。大殿を作り。其殿のうちに。押を機て。待けるときに。弟宇迦斯先參向て。拝てまをさく。僕兄宇迦斯。天神の御子の使を射かへし。待攻むとして。軍をあつむれども。得あつめざれば。殿をつくり。其のうちに。押を張て。待取むとす。故參向てあらはし白とまをしき。ここに大伴連らが祖。道臣命。久米直らが祖。大久米命二人。兄宇迦斯をめて。罵詈雑言いひけらく。伊賀つくり仕奉る大殿の内にハ。意禮先入て。其つかへまつらむとする状を明しませといひて。横刀の手上握しぱり。矛由氣矢刺て。追入るときに。己がはりをける押し打てて死す。爾ひきいだして。斬散き。故其地を宇陀の血原となもいふ。しかしてその弟宇迦斯が獻れる大饗をバ。ことごとくに其御軍びとどもに賜き。此時に歌曰。うだの。たかきに。しぎはなはる。わがまつや。しぎはさやらず。いすくはし。くじらさやる。こなみが。なこはさバ。たちそばのみの。なけくを。こきしひゑね。うはなりが。なこはさバ。いちさかきみの。おほけくを。こきだひゑね。ええしやこしや。こはいごのふぞ。ああしやこしや。こはあざわらふぞ。故その弟宇迦斯此者宇陀水取等之祖也。其地より幸行て。忍坂の大室にいたりませるときに。尾ある土雲八十建。其室にありて。待伊那流。故ここに天神の御子の命もちて。八十建に饗を賜き。ここに八十建に宛て。八十膳夫を設て。人毎に刀佩て。其膳夫等に。歌を聞バ。一時に斬とをしへたまひき。故其土雲を打むとすることを明せる歌曰。おさかの。おほむろやに。ひとさはに。きいりを。ひとさはに。いりをりとも。みつみつし。くめのこが。くぶつつい。いしつついもち。うちてしやまむ。みつみつし。くめのこらが。くぶつつい。いしつついもち。いもうたバよろし。如此歌て。刀を抜て。もろともに打殺つ。然後登美毘古を撃たまはむとせし時の歌曰。みつみつし。くめのこらが。あはふにハ。かみらひとと。そねがもと。そねめつなきて。うちてしやまむ。又歌曰。みつみつし。くめのこらが。かきもとに。うゑしはじかみ。くちひびく。われハわすれじ。うちてしやまむ。又歌曰。かむかぜの。いせのうみの。おひしに。はひもとほろふ。しただみの。いはひもとほり。うちてしやまむ。又兄師木弟師木を撃たまへる時に。御軍暫ハ疲たりき。そのときの歌曰。たたなめて。いなさのやまの。このまよも。いゆきまもらひ。たたかへバ。われハやゑぬ。しまつとり。うかひがとも。いますけにこね。故ここに邇藝速日命。參赴て。天神の御子にまをさく。天神の御子天降坐ぬと聞つるゆゑに。追て參降來つとまをして。即天津瑞をたてまつりて。仕奉き。故邇藝速日命。とみび古が妹。登美夜毘賣に娶て。生る子。宇摩志麻遲命此者物部連穗積臣孫也。故かくのごと。荒夫琉神等を言向和し。不伏人等をはらひ平げたまひて。畝火の白禰原の宮に坐て。天下治めしき。故日向に坐しとき。阿多の小櫓の君の妹。名ハ阿比良比賣を娶て。生ませる子。多藝志美美命。つぎに岐須美美命。二柱坐り。しかれどもさらに大后と爲む美人を求たまふ時に。大久米命のまをさく。ここに神の御子なりとまをす媛女あり。其を神の御子なりとまをすゆゑに。三嶋の湍咋の女。名ハ勢夜陀多良比賣。それ容姿よかりければ。美和の大物主神。見感

て。そのをとめの。爲大便之ときに。丹塗矢に化て。その大便之溝流下より。其美人の富登を突た  
まひき。爾その美人おどろきて。立はしり伊須須岐伎。乃てその矢をもち来て。床の邊に置しか  
ば。忽にうるはしき壯夫に成て。即その美人に娶て。生ませる子。名ハ富登多多良伊須須岐  
比賣命。またの名ハ比賣多多良伊須氣余理比賣とまをす。是者惡其富登云事後改名者也。故ここを  
もて神の御子とハ謂なりとまをしき。ここに七媛女。高佐士野に遊べる。伊須氣余理比賣そのなか  
にありき。大久米命その伊須氣余理比賣を見て。歌もて天皇に白曰。やまとの。たかさじぬを。  
ななゆく。をとめども。たれをしまかむ。爾に伊須氣余理比賣ハ。その媛女どもの前にたてりき。  
天皇そのをとめどもを見そなはして。御心に伊須氣余理比賣の最前に立ることをしりたまひて。  
歌もて答曰。かつがつも。いやさきだてる。えをしまかむ。爾に大久米命。天皇の命を。その  
伊須氣余理比賣に詔るときに。その大久米命の黥る利目を見て。奇と思歌曰。あめつつ。ちどり  
ましと。などさけるとめ。とうたひければ。大久米命をとめに。ただにあはむと。わがさけるとめ。  
と歌ひてぞ答ける。かれその嬢子。仕奉むとまをしき。ここにその伊須氣余理比賣命の家。  
狹井河の上にありき。天皇その伊須氣余理比賣の許幸行て。一宿御寢ましき其河謂佐韋河由者。  
於其河邊山由理草多在。故取其山由理草之名。號佐韋河也山由理草之本名云佐韋也。後其伊須氣余理比賣。宮内  
に參入時に。天皇御歌曰。あしはらの。しげこきをやに。すがたたみ。いやさやしきて。わがふ  
たりねし。然してあれませる御子の名ハ。日子八井命。つぎに神八井耳命。つぎに神沼河耳命  
三かれ天皇崩ましてのちに。その庶兄多藝志美美命。その嫡后伊須氣余理比賣にたはくると  
きに。その三柱の弟たちを殺むとして。謀ごつほどに。その御祖伊須氣余理比賣患まして。歌  
よみして。其御子等に知しめたまへりし。歌曰。さみがはよ。くもたちわたり。うねびや  
ま。このはさやぎぬ。かぜふかむとす。又歌曰。うねびやま。ひるハくもとぬ。ゆふされ  
バ。かぜふかむとぞ。このはさやげる。於是その御子等聞知まして。おどろきて。乃  
當藝志美美を殺むとしたまふ時に。神沼河耳命。その兄神八井耳命にまをしたまはく。  
那泥汝命。兵をとりて入て。當藝志美美を殺たまへとまをしたまひき。故兵をとりて入て。殺  
むとしたまふ時に。手足和那那岐弓得殺たまはざりき。故ここにその弟神沼河耳命。その  
兄の持せる兵を乞とりて。入て。當藝志美美を殺たまひき。故またその御名を稱て。  
建沼河耳命とまをしき。ここに神八井耳命。弟建沼河耳命に讓てまをしたまはく。吾ハ。仇  
を得殺ず。汝命すでに得殺たまひぬ。かれ吾ハ兄なれども。上とあるべからず。ここを  
もて汝命爲上。天下治めせ。僕ハ。汝命を扶て。忌人となりて。仕奉むとまをした  
まひ。かれその日子八井命ハ茨田連手嶋連之祖。神八井耳命ハ意富臣。小子部連。坂合部連。火君。  
オホキダノキミ アソノキミ ツクシノキヤケノムラジ サザキベノオミ サザキベノミヤツコ 小ハツセノミヤツコ ツケノアタヘ イノクニノミヤツコ シナスクニノミヤツコ ミチノクノイハクノクニノミヤツコ  
大分君。阿蘇君。筑紫三家連。雀部臣。雀部造。小長谷造。都祁直。伊余國造。科野國造。道奥石城國造。  
ヒタチナカノクニノミヤツコ ナガサクノクニノミヤツコ イセフナキノアタヘ ヲハリノニハノオミ シマダノオミラ ガオヤナリ カむぬなかハミミのみこと あめのした  
常道仲國造。長狹國造。伊勢船木直。尾張丹羽臣。嶋田臣等之祖也。神沼河耳命ハ天下しろしめき。す  
べてこの神倭伊波禮毘古天皇。御年百三十七。御陵ハ畝火山の北の方白檮尾の上にあり。

二 綏靖天皇  
かむぬなかハミミのみこと かづらき たかをか みや ましへ あめのしたしろし すめらみこと しき あがたぬし おや  
神沼河耳命。葛城の高岡の宮に坐て。天下治めしき。この天皇。師木の縣主の祖。  
かハまたびめ めし うみませ みこ しきつひこたまでのみこと 一のすめらみこと みとしよそぢまりつつ みはか つきだのをか  
河俣毘賣を娶て。生坐る御子。師木津日子玉手見命。此天皇。御年四十五。御陵ハ衝田岡に  
あり。

三 安寧天皇  
しきつひこたまでのみこと かたしハ うきあな みや ましへ あめのしたしろし すめらみこと かハまたびめ せ  
師木津日子玉手見命。片鹽の浮穴の宮に坐て。天下治めしき。この天皇。河俣毘賣の兄。  
あがたぬし はえ むすめ あくと うみ みこ とこねつひこいろねのみこと  
縣主殿延の女。阿久斗比賣をめして。生ませる御子。常根津日子伊呂泥命。つぎに  
おほやまとひこすきとものみこと しきつひこのみこと すめらみこと みこたち みはしら  
大倭日子鉏友命。つぎに師木津日子命。この天皇の御子等。あハせて三柱のうち。

おほやまとひこすきとものみこと あめのした しきつひこのみこと みこ ふたはしら ひとはしら みこ  
大倭日子鉏友命ハ天下しろしめき。つぎに師木津日子命の子。二柱ませる。一子の孫ハ  
イガノスチノイナキ ナバリノイナキ ミヌノイナキノヤナ ひと みこ ちちつみのみこと あはち みあのみや ましへ  
伊賀須知之稻置。那波理之稻置。三野之稻置之祖。一はしらの子。知知都美命ハ。淡道の御井宮に 坐き。かれ  
みこ みむすめふた いろね な はへい ろね な おほやまとくにあれひめのみこと いろど  
この王。女 二はしらましき。兄の名ハ蠅伊呂泥。またの名ハ意富夜麻登久邇阿禮比賣命。弟  
な はへい ろど すめらみこと みとしよそぢまりこのつ みはか うねびやま みほと  
の名ハ蠅伊呂杼。この天 皇。御年四 十九。御陵ハ畝火山の美富登にあり。

四 懿德天皇

おほやまとひこすきとものみこと かる さかひ を みや ましへ あめのしたしろし すめらみこと しき あがたぬし おや  
大倭日子鉏友命。輕の境岡の宮に 坐て。天下治めしき。この天 皇。師木の縣主の祖。  
ふとまわかひめのみこと な いひひめのみこと うみ みこ みまつひこかゑしねのみこと  
賦登麻和訶比賣命。またの名ハ飯日比賣命をめて。生ませる御子。御眞津日子訶惠志泥命。  
たぎしひこのみこと二 みまつひこかゑしねのみこと あめのした たぎしひこのみこと  
つぎに多藝志比古命<sup>柱</sup>かれ御眞津日子訶惠志泥命ハ。天下しろしめき。つぎに多藝志比古命  
チヌノワケ タヂマノタケワケ アシキノイナキノオヤナリ このすめらみこと みとしよそぢまりつ つみはか うねびやま まなごたに へ  
ハ血沼之別。多邇麻之竹別。葦井之稻置之 祖。天 皇。御年四 十五。御陵ハ畝火山の眞名子谷の上にあ  
り。

五 孝昭天皇

みまつひこかゑしねのみこと かづらき わき かみのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと をはりのむらじ おや  
御眞津日子訶惠志泥命。葛城の掖の上 宮に 坐て。天下治めしき。この天 皇。尾張連の祖。  
おきつよそ いも な よそたほびめのみこと うみ みこ あめおしたらしひこのみこと おほやまと  
奥津余曾の妹。名ハ余曾多本毘賣命をめて。生ませる御子。天押帶日子命。つぎに大倭  
たらしひこにおしびとのみこと二 いろせおしたらしひこのみこと あめのした いろせあめおしたらしひこのみこと  
帶日子國押人命<sup>柱</sup>かれ弟帶日子國忍人命ハ。天下しろしめき。兄 天押帶日子命ハ 春日臣。  
オホヤケノオミ アハタノオミ ラノオミ カキノオミ イチヒキノオミ オホサカノオミ アナノオミ タキノオミ ハグリノオミ チタノオミ ムザノオミ ツヌヤマノオミ イセノヒタカノオミ  
大 宅 臣。粟 田 臣。小野臣。柿 本 臣。壹比韋臣。大 坂 臣。阿那臣。多紀臣。羽粟臣。知多臣。牟那臣。都怒山臣。伊勢飯高君。  
イチシノオミ チカツアノオミクニミヤツノ オヤナリ すめらみこと みとしよそぢまりつ つみはか わきのみか はかた やま へ  
壹師君。近 淡 海 國 造之祖也。この天 皇。御年九 十三。御陵ハ掖上の博多の山の上にあり。

六 孝安天皇

おほやまとたらしひこにおしびとのみこと かづらき むろ あきつしまみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと みめひ  
大倭帶日子國押人命。葛城の室の秋津嶋宮に 坐て。天下治めしき。この天 皇。姪  
おしかひめのみこと みあひ うみ みこ おほきび もろすすみのみこと おほやまとね こひこふとにのみこと二  
忍鹿比賣命に 娶まして生ませる御子。大吉備の諸 進 命。つぎに大倭根日子賦斗邇命<sup>柱</sup>かれ  
おほやまとね こひこふとにのみこと あめのした すめらみこと みとしよそぢまりはちみつ みはか たまで をか へ  
大倭根日子賦斗邇命ハ。天下しろしめき。この天 皇。御年百二十三。御陵ハ玉手の岡の上  
にあり。

七 孝靈天皇

おほやまとね こひこふとにのみこと くるだ いほのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと とほちのあがたぬし おや  
大倭根日子賦斗邇命。黒田の廬戸宮に 坐て。天下治めしき。この天 皇。十市縣主の祖。  
おほめ むすめ な くはしひめのみこと うみ みこ おほやまとね こひこくくるのみこと一  
大目の女。名ハ細比賣命をめて。生ませる御子。大倭根日子國玖琉命<sup>柱</sup>また  
かすがのちちはやまわかひめ うみ みこ ちちはやひめのみこと二 おほやまとくにあれひめのみこと  
春日千千速眞若比賣をめて。生ませる御子。千千速比賣命<sup>柱</sup>また意富夜麻登久邇阿禮比賣命  
みあひ うみ みこ やまとともそびめのみこと ひこさしかたわけのみこと  
に 娶まして生ませる御子。夜麻登登母母曾毘賣命。つぎに日子刺肩別命。つぎに  
ひこいせりびこのみこと二 みな おほきびつひこのみこと やまととびはわかやひめ<sup>四</sup>  
比古伊佐勢理毘古命。またの名ハ大吉備津日子命。つぎに倭飛羽矢若屋比賣<sup>柱</sup>また その  
あれひめのみこと いろど はへい ろど みあひ うみ みこ ひこさめまのみこと わかひこたけ  
阿禮比賣命の弟。蠅伊呂杼に 娶まして生ませる御子。日子寤間命。つぎに若日子建  
きびつひこのみこと二 すめらみこと二 みこ たち やはしら おほやまとね こひこく  
吉備津日子命<sup>柱</sup>この天 皇御子等。あはせて八柱ませり<sup>ヒコイツハシラヒメミコハシラ</sup>男王 五 女王 三。かれ大倭根日子國  
くるのみこと あめのした おほきびつひこのみこと わかたけきびつひこのみこと ふたはしらあひそハ はりま  
玖琉命ハ。天下しろしめき。大吉備津日子命と。若建吉備津日子命とハ。二柱相副して。針間  
ひのかハ さき いハひベ すゑ はりま みち うち きびのくに ことむけやハ くれ  
の氷河の前に。忌瓮を居て。針間を道の口として。吉備國を言向和したまひき。故この  
おほきびつひこのみこと キビノカムツミチノオミノオヤナリ わかひこたけきびつひこのみこと キビノシモツミチノオミカサノオミノオヤナリ  
大吉備津日子命ハ吉備上道臣之祖也。つぎに若日子建吉備津日子命ハ吉備下道臣 笠祖也。つぎ  
ひこさめまのみこと コシノナミノオミ トヨクニクニサノオミ イホバラノオミ ツヌガノアマノオヤナリ すめらみこと みとしよそぢまりつ つみはか  
に日子寤間命ハ高志之利波臣。豊國之國前臣。五百原君。角 鹿 海 直之祖也。この天 皇。御年百 六。御陵ハ  
かたをか うまさか へ  
片岡の馬坂の上にあり。

八 孝元天皇

おほやまとね こひこくくるのみこと かる だかひばらのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと ほづみ おみら おや  
大倭根日子國玖琉命。輕の堺原宮に 坐て。天下治めしき。この天 皇。穗積の臣等が祖。  
うちしこをのみこと いも うちしこめのみこと うみ みこ おほびこのみこと すくなびこたけぬごころのみこと  
内色許男命の妹。内色許賣命をめて。生ませる御子。大毘古命。つぎに少名日子建猪心命。  
おかやまとねこひこおほびのみこと三 うちしこをのみこと むすめ いがかしにめのみこと うみ  
つぎに若倭根日子大毘古命<sup>柱</sup>また内色許男命の女。伊賀迦色許賣命をめて。生ませる  
みこ ひこふつおしこのみこと二 かふち あをたま むすめ な はに やすびめ うみ みこ  
御子。比古布都押之信命。また河内の青玉が女。名ハ波邇夜須毘賣をめて。生ませる御子。  
たけはにやすびのみこと二 すめらみこと二 みこ たち いつはしら わかやまとねこひこおほびのみこと  
建波邇夜須毘古命<sup>柱</sup>この天 皇御子等。あはせて五柱ませり。かれ若倭根日子大毘古命ハ。

あめのした いろせおほびこのみこと みこ たけぬなひわけのみこと アベノオミラガオヤ ひこいなこしわけのみこと  
天下しろしめき。その兄大毘古命の子。建沼河別命ハ阿倍臣等之祖。つぎに比古伊那許志別命  
コハカシヘノオミ ノオヤナリ ひこふつおしのまことのみこと をはりのむらじら おや おほなび いも かづらき たかちなびめ みあひ  
此者膳 臣之祖也。比古布都押之信命。尾張連等が祖。意富那毘が妹。葛城の高千那毘賣に娶  
うみ うみ たけうちの子 けいこ けいこ  
てませせる御子。建内宿禰。この建内宿禰の子。あはせて九男七女二。波多八代宿禰ハ  
ハタノオミ ハヤシノオミ ハミノオミ ホシカハノオミ アフミノオミ ハセベノキミオヤナリ こせ をからのすくね コセノオミ ササキベノオミ カルベノオミ ノオヤ  
波多臣。林 臣。波美臣。星 川 臣。淡海臣。長谷部君祖也。つぎに許勢の小柄宿禰ハ許勢臣。雀 部 臣。輕部 臣之祖  
ナリ すが いしかへのすくね ソガノオミ カハノベノオミ タナカノオミ タカムコノオミ ヲハラダノオミ サクラキノオミ キシダノオミラ ノオヤナリ へぐり  
也。つぎに蘇賀の石 河宿禰ハ蘇我臣。川 邊 臣。田中臣。高 向 臣。小和田臣。櫻 井 臣。岸 田 臣等之祖也。つぎに平郡  
つきのすくね へグリノオミ サワラノオミ ウマキヒノムラジラ ノオヤナリ キノオミ ツヌノオミ サカモトノオミ ノオヤ  
の都久宿禰ハ平群臣。佐和良臣。馬 御 機 連等之祖也。つぎに木角宿禰ハ木 臣。都奴臣。坂 本 臣之祖。つぎに  
くめのまじとひめ ヌノイロヒメ かづらき ながえのそつびこ タマデノオミ イクハノオミ イクエノオミ  
久米能摩伊刀比賣。つぎに怒能伊呂比賣。つぎに葛城の長江曾都毘古ハ玉手臣。的 臣。生江臣。  
アギナノオミラ ノオヤナリ わくごのすくね エヌマノオミ ノオヤ すめらみこと みとしそまりなつ みはか つるぎ いけ なか  
阿藝那臣等之祖也。また若子宿禰ハ江野財臣之祖。この天 皇。御年五十七。御陵ハ劔の池の中の岡の  
へ  
上にあり。

九開化天皇  
わかやまとねこひこおほびのみこと かすが いざかのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと たには  
若倭根子日子大毘古命。春日の伊邪河宮に坐て。天下治めしき。この天 皇。且波の  
おほがたぬしな ゆごり むすめ たけぬひめ めし うみ みこ ひこゆむすのみこと  
大縣主名ハ由基理が女。竹野比賣を娶て。ませせる御子。比古由牟須美命。またみまはは  
いがかしこめのみこと みあひ うみ みこ みまきいりびこいにゑのみこと みまつひめのみこと  
伊賀迦色許賣命に娶まして。ませせる御子。御眞木入日子印惠命。つぎに御眞津比賣命。また  
丸邇臣之祖。日子國意祁都命の妹。意祁都比賣命をめて。ませせる御子。日子坐玉。また葛城  
たるみのすくね むすめ わしひめ うみ みこ たけとよはづらわけのみこと すめらみこと みこたち  
の垂見宿禰の女。鸛比賣をめて。ませせる御子。建豊波豆羅和氣王。この天 皇の御子等。あ  
いっはしら ヒコミヨハシラヒメゴヒトハシラ みまきいりびこいにゑのみこと あめのした みこのかみ  
はせて五柱男王 四 女 一 柱。かれ御眞木入日子印惠命ハ。天下しろしめき。その 兄  
ひこゆむすのみこと みこ おほつきたりねのみこ さぬぎたりねのみこ ふたはしらのみこ みむすめいっはしら  
比古由牟須美命の子。大筒木垂根王。つぎに讃岐垂根王。この二 王の女五柱ましき。つぎ  
ひこいますのみこ やましろ えなつひめ なかりばたとべ みあひ うみ みこ おほまたのみこ  
に日子坐玉。山代の荏名津比賣。またの名ハ苅幡戸辨に娶て。ませせる御子。大俣王。つぎに  
をまたのみこ しぶみ のすくねのみこ かすが たけくにかつとめ むすめ な さほ おほくらとめ みあひ  
小俣王。つぎに志夫美宿禰王。また春日の建國勝戸賣が女。名ハ沙本の大閨見戸賣に娶て。  
うみ みこ さほびこのみこ をざほのみこ さほびめのみこと みな さほじひめ 此  
ませせる御子。沙本毘古王。つぎに袁邪本王。つぎに沙本毘賣命。またの名ハ佐波遲比賣。此  
サホビメミコトハイクメミコトサキキトマセリ むろびこのみこ ちかつあふみ みかみ はり もちいつく みあひ  
沙本毘賣命者爲伊久米天皇之后。つぎに室毘古王。また近 淡海の御上の祝が以伊都玖。天の御影神の  
むすめ おきながみづよりひめ みあひ うみ みこ たには ひこたたすみちのうしのみこ みづほ  
女。息長水依比賣に娶て。ませせる御子。丹波の比古多多須美知能宇斯王。つぎに水穂の  
まわかのみこ かむおほねのみこ な やつりいりびこのみこ みづほ いほよりひめ  
眞若王。つぎに神大根王。またの名ハ八爪入日子王。つぎに水穂の五百依比賣。つぎに  
おきつひめ みはほ おどをけつひめのみこと みあひ うみ みこ やましろ おほつきのまわかのみこと  
御井津比賣。また其母の弟袁邪都比賣命に娶て。ませせる御子。山代の大筒木眞若王。つぎに  
ひこおすのみこ いりねのみこ ひ こいますのみこ とをまりいっはしら このかみおほまたのみこ  
比古意須王。つぎに伊理泥王。すべて日子坐 王の子。あはせて十一 五王。かれ 兄 大俣王の  
みこ あけたつのみこ うなかのみこ あけたつのみこ イセノホムジノキミ イセノサナミヤツコノオヤ うなかのみこ ヒメダノキミノオヤ  
子。曙立王。つぎに菟上王。この曙立王ハ伊勢之品遲部君。伊勢之佐 那 造之祖。菟上王ハ比賣陀君之祖。つ  
ぎに小俣王。當 麻 勾 君之祖。つぎに志夫美宿禰王ハ佐佐君之祖也。つぎに沙本毘古王ハ下部連。  
カヒクニミヤツコノオヤ をざほのみこ カツヌワケ チカツアフミカヌワケオヤナリ むろびこのみこ ワカサノミノワケノオヤ  
甲 斐國 造之祖。つぎに袁邪本王ハ葛野之別。近 淡海蚊岐之別也。つぎに室毘古王ハ若狭之耳 別之祖。そ  
みちのうしのみこ たには かはかみ ますのいらつとめ みあひ うみ みこ ひばすひめのみこと  
の美知能宇志王。丹波の河上の摩須郎女に娶て。ませせる子。比賣須比賣命。つぎに  
まとぬひめのみこと おとひめのみこと みかどわけのみこ みかどわけのみこ ミカハノホワケノオヤ  
眞砥野比賣命。つぎに弟比賣命。つぎに朝廷別王。この 朝廷 別 王 ハ三 川之 穂 別之 祖。この  
みちのうしのみこ おと みづほ まわかのみこ チカツアフミノヤスアタヒノオヤ かむおほねのみこ ミヌクニミヤツコ モトスノクニミヤツコ  
美知能宇斯王の弟。水穂の眞若王ハ近 淡海之安 直之祖。つぎに神大根王ハ三野國之。本 巢 國 造。  
ナガハタベムラジノオヤ やましろ おほつきのまわかのみこと いろ とりりねのみこ みむすめ もねの あじ さはびめ  
長 幡 部 連之祖。つぎに山代の大筒木眞若王。同母弟伊理泥王の 女。母泥能阿治佐波毘賣に  
みあひ うみ みこ かにめいかづちのみこ みこ たには とほつのおみ むすめ な たかきひめ みあひ うみ  
娶て。ませせる子。迦邇米雷王。この王。丹波の遠津臣の女。名ハ高材比賣に娶て。ませせる  
みこ おきながのすくねのみこ みこかづらき たかぬかひめ みあひ うみ みこ おきながたらしひめのみこと  
子。息長宿禰王。この王葛城の高額比賣に娶て。ませせる子。息長帶比賣命。つぎに  
そらつひめのみこと おきながひこのみこ コノミホキビノホムジノキミ ハリマノソノキミノオヤ おきながのすくねのみこ かはまた  
虚空津比賣命。つぎに息長日子王。三柱此者吉備品遲君。針間阿宗君之祖。また息長宿禰王。河俣の  
いなよりひめ みあひ うみ みこ おはたむさかのみこ コハチマノクニミヤツコノオヤナリ かみ たけとよはづらわけのみこ  
稻依毘賣に娶て。ませせる子。大多牟坂王。此者多遲摩國 造之祖也。上にいへる建豊波豆羅和氣王  
チモリノオミ オシヌミベミヤツコ ミナベミヤツコ イナバノオシヌミベ タニハノタケヌワケ ヨサミノアピコラガオヤナリ すめらみこと みとしむそまりなつ みはか  
八道守臣。忍 海 部 造。御名部造。稲羽忍海部。丹波之竹野別。依網之阿毘古等之祖也。この天 皇。御年六十三。御陵  
いざかへ へ  
ハ伊邪河の坂の上にあり。

十崇神天皇  
みまきいりびこいにゑのみこと しき みづがきのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと きくに みやつこな  
御眞木入日子印惠命。師木の水垣宮に坐て。天下治めしき。この天 皇。木國の造名ハ



あらかハ と ベ むすめ とほつ のあゆめめくはしひめ うみ み こ とよきいりびこのみこと  
荒河刀辨が女。遠津年魚目目微比賣をめして。生ませる御子。豊木入日子命。つぎに  
とよきいりびのみこと をはり むらじ おや おほあまひめめし うみ み こ おほいりきのみこと  
豊鉏入日賣命また尾張の連の祖。意富阿麻比賣を娶て。生ませる御子。大入杵命。つぎに  
やさか いりびのみこと ぬ なき のいりびのみこと とをちのいりびのみこと 四 おほびこのみこと むすめ  
八坂の入日子命。つぎに沼名木入日賣命。つぎに十市入日賣命また大毘古命の女。  
みまつひめのみこと みあひ うみ み こ いくめいりびこいさちのみこと いさのまわかのみこと  
御眞津比賣命に娶まして。生ませる子。伊玖米入日子伊沙知命。つぎに伊邪能眞若命。つぎに  
くにかたひめのみこと ちおつくやまとひめのみこと いがひめのみこと やまとひのみこと 六 すめらみこと  
國片比賣命。つぎに千千都久和比賣命。つぎに伊賀比賣命。つぎに倭日子命この天 皇の  
み こたち とをまりふたはしら ヒコミコナハシラヒメミコイツハシラマス いくめいりびこいさちのみこと あめのした  
御子等。あはせて十二柱男王七女王五也。かれ伊玖米入日子伊沙知命ハ。天下しろしめし  
とよきいりびのみこと カミツケヌノキミモツケヌノキミラ ガオヤナリ いもとよきひめのみこと イセノホホカミミキヤイツキマツタマセキ  
き。つぎに豊木入日子命ハ上毛野君下毛野君等之祖也。妹豊鉏比賣命ハ禰祭伊勢大神之宮也。つぎ  
おほいりきのみこと ハノオミノ オヤナリ やまとひのみこと コノミコトキニハジメテミハカニヒトガキヲタリキ すめらみこと みよ え やみさは  
に大入杵命ハ能登臣之祖也。つぎに倭日子命此王之時始而於陵立人垣。この天皇の御世に疫病多  
おほみたからうせ つきなむとす すめらみこと かむとこ まし よ おほものぬしのおほかみ  
におこり。人 民死て。爲 盡。ここに天 皇うれひたまひて。神牀に坐ませる夜。大物主大神。  
みいめ こ あがみこころ おほたたぬこ あがみまへ まつら  
御夢にあらはれてのりたまはく。是ハ我之御心ぞ。かれ意富多多泥古をもて。我御前を祭  
かみ け くにたひらぎ はゆまづかひ よも  
しめたまはバ。神の氣おこらず。國安平なむとのりたまひき。ここをもて驛 使を四方に  
おほたぬこちふひと ととき かふち みぬのむら ひと みえ  
あかちて。意富多多泥古謂人をもとむる時に。河内の美怒村に。その人を見得てたてまつ  
すめらみこと いまし たがこ とひ あ おほものぬしのおほかみ すえつみのみこと むすめ いくたまよりびめ  
りき。ここに天 皇。汝ハ誰子ぞと問たまひき。僕ハ大物主大神。陶津耳命の女。活玉依毘賣  
みあひ うみ み こ にくしみがたのみこと こ いひがたすのみこと こ たけみかづのみこと おほれ おほたぬこ  
に娶て。生ませる子。名ハ櫛御方命の子。飯肩巢見命の子。建甕槌命の子。僕 意富多多泥古  
まをしき すめらみこといたくよこ あめのしたたひら おほみたからさかえ すなはち  
と答白。ここに天 皇大 歡びたまひて。天下平ぎ人 民榮なむとのりたまひて。即 この  
おほた たぬこみこと かむぬし みもろやま おほまわ おほかみ みまへ まつり  
意富多多泥古命を。神主として。御諸山に意富美和之大神の前をいつき祭たまひき。また  
い がしこをのみこと おほせ あめ やそびらか あまつかみにつかみ やしろ さだめ  
た伊迦賀色許男命に仰て。天の八十毘羅訶をつくり。天神地祇の社を定まつりたまひ  
うだ すみさかのかみ あかいろ たてほこ おほさかのかみ くろいろ たてほこ  
き。また宇陀の墨坂神に。赤色の楯矛をまつり。また大坂神に。黒色の楯矛をまつり。  
さか みをのかみ かハ せのかみ みてくら  
また坂の御尾神。河の瀬神まで。ことごとにおつることなく。幣帛たてまつりたまひき。こ  
かみのけことやみ あめのしたたひらぎ おほた たぬこちふひと かみ みこ かみ  
れによりて役氣 悉に息て。國家安平き。この意富多多泥古謂人を。神の子としれるゆゑハ。上  
いくたまよりびめ かほ かみおとこ よ  
にいへる活玉依毘賣。それ容姿よかりき。ここに神壯夫ありて。そのかほすがた。時にた  
よなか たらまちき かれあひめで すめらほど いくだ あらね せとのほらみ  
ぐひなきが。夜半に。忽 來つ。故相感て。共住婚間に。幾時も未經バ。その美人妊身ぬ。  
ちちはは ほらめ あや むすめ いまし ほら をなき い か  
ここに父母その妊身ことを怪しみて。その女に。汝ハおのづから妊めり。無夫に。何由にしてか  
ほらめ とひ こたへけらく をとこ なもし よごと きよと すめ  
も妊身ると問バ。答 曰。うるはしき壯夫の。その姓名知らぬが。夕毎に來て。住供る間に。おのづ  
ほらみ そのちちはは そのひと しら ほり むすめ をしへつく はに とこ べ  
から懷妊ぬといふ。ここをもて其父母。其人を知らく欲て。其女に誨 曰ハ。赤土を床の前にちら  
へそ をはり ぬき させ ぬきをしへ あした み はりつけ を  
し。閑蘇麻紡針に貫て。その衣の欄に刺とをしふ。故教しこどして。且に見れば。針著たりし麻  
と かざあな とほ で ただ を みわのみ かれ かざあな いで きま  
ハ。戸の鉤穴よりひき通り出て。唯のこれる麻ハ。三勾耳なりき。爾ここに鉤穴より出し状をしりて。  
いと たづぬゆき みわやま かみ やしろ かれそのかみ みこ し  
糸のまにまに尋 行しかバ。美和山にいたりて。神の社にとどまりにき。故其神の子なりとハ知り  
かれそのを みわのこれ そこみわ こんおホタタネコノミコトハミツキカモノキノ オヤナリ また  
ぬ。故其麻の三勾遺るによりてなも。其地を美和とハ謂ける此意富多多泥古命者神 君鴨 君之 祖。又この  
みよ おほびこのみこと こし みち みこたけぬなかわけのみこと ひむがし かたとをまりふたみち つかは  
御世に。大毘古命をバ。高志の道につかはし。その子建沼河別命をバ。東の方十二道に遣し  
その ひとども こと やわ またひこいすのみこ たにはのくに くがみ み かさ  
て。其まつろはぬ人等を平むけ和さしめ。又日子坐王をバ。且波國につかはして。玖賀耳の御笠  
とら かれおほびこのみこ こしのくに まかります こしもけ をとめ やましろ へらざか たて  
を殺しめたまひき。故大毘古命。高志國に罷 往ときに。腰裳服せる少女。山代の幣羅坂に立  
うたひけらく  
りて。歌 曰。こはや。みまき。いりびこはや。おのがをを。ぬすみしせむと。しりつと  
よ。いゆきたがひ。まへつとよ。いゆきたがひ。うかかはく。しらにと。みまき。いりび  
ここに おほびこのみことあやし おも うま かへ そのをとめ いまし いへ こといか こと とひ  
こはや。於は大毘古命怪と思ひて。馬を返して。其少女に。汝が謂る言何にふ言ぞと問たまへ  
をとめ あれ いは ただうた うた こたへ み たちまち うせ かれおほびこのみこと  
バ。少女。吾もの言ず唯歌をこそ詠ひつれと答て。ゆくへも見えず。忽に失にき。故大毘古命。  
さら かへ まのほ みよ ととき すめらみこと のり こ やましろのくに な まませ  
更に還り參上りて。御世時に。天 皇詔たまはく。此ハおもふに。山代國なる。我が庶兄  
たけはにやすのみこ きたなきころ しるし をじ いくさ ゆか  
建波邇安王の。邪 心をおこせる表にこそあらめ。伯父。軍をおこして。行せとのりたま  
すなわちわにおみ おや ひ こくにぶのみこと そへ つかはず わにさか いはひべ すす  
ひて。即 丸邇臣の祖。日子國夫玖命を副て。遣 ときに。丸邇坂に忌瓮を居て。まかり往  
やましろ わ からがハ たけはにやすのみこ いくさ まちさへぎ  
き。ここに山代の和訶羅河にいたれるときに。その建波邇安王。軍をおこして待遮り。おの

もおのも河を中に狹て。對立て相挑き。故其地の號を。伊杼美といひしを。今ハ伊豆美とぞいふ。ここに日子國夫玖命。其廂の人まづ忌矢はなてと乞ままに。建波邇安王射つれども。得あてざりき。ここに國夫玖命のはなてる矢ハ。建波邇安王に射あてて。死き。故その軍悉に破て逃散ぬ。ここに其逃る軍を追せて。久須婆わたりにいたる時に。皆迫らえ窺て。屎出て。禪にかかりき。故其地の號を。屎禪といひしを。今ハ久須婆とぞいふ。又その逃る軍を遮て斬ば。鵜のごと河に浮たりき。故その河を鵜河といふ。亦その軍士を斬はふりしゆゑに。其地の號を波布理會能となもいふ。かくことむけ訖て。參上りて覆こと奏たまひき。故大毘古命ハ。先の命のまにまに。高志國にまかり行き。ここに東の方より所遣建沼河別。その父大毘古と共に。相津に往遇たまひき。故其地を相津といふ。ここをもておのもおのも所遣つる國の政ごと和平て。覆こと奏たまひき。故天下太平。人 民富榮き。ここに初て男の弓端の調。女の手末の調を貢らしめたまひき。故其御世を稱まつりて。初國所知し御眞木天皇とまをす。又この御世に。依網の池をつくり。また輕の酒折の池をつくらしき。この天皇。御歳百六十八。御陵ハ山の邊の道の勾の岡の上にあり。

十一 垂仁天皇

伊玖米伊理毘古伊沙知命。師木の玉垣宮に坐て。天下治めしき。この天皇。沙本毘古命の妹。佐波遲比賣命に娶まして。生ませる御子。品牟都和氣命。また旦波の比古。多須美知能宇斯王の女。氷羽州比賣命に娶まして。生ませる御子。印色之入日子命。つぎに大帶日子淤斯呂和氣命。つぎに大中津日子命。つぎに倭比賣命。つぎに若木入日子命。またその氷羽州比賣命の弟。沼羽田之入毘賣命をめして。生ませる御子。沼帶別命。つぎに伊賀帶日子命。またその沼羽田之入毘賣命の弟。阿邪美能伊理毘賣命をめして。生ませる御子。伊許婆夜和氣命。つぎに阿邪美都比賣命。また大筒木垂根王の女。迦具夜比賣命をめして。生ませる御子。袁邪辨王。また山代大國の淵が女。苺羽田刀辨をめして。生ませる御子。落別王。つぎに五十日帶日子王。つぎに伊登志別王。またその大國の淵が女。弟苺羽田刀辨をめして。生ませる御子。石衝毘賣命。またの名ハ布多遲能伊理毘賣命。すべてこの天皇の御子等。十六王男王。三女王。三。かれ大帶日子淤斯呂和氣命ハ。天下しろしめき。御身長一丈二寸。御腰長四尺一寸也。つぎに印色之入日子命ハ。血沼の池をつくり。また狹山の池をつくり。又日下の高津の池をつくりたまひき。又鳥取の河上宮に坐て。横刀壹仞口をつくらしめたまひき。是を石上神宮に奉納たまひき。即其宮に坐て。河上部をさだめたまひき。つぎに大中津日子命ハ山邊之別。三枝之別。稻木之別。阿太之別。尾張國之三野別。吉備之石无別。許呂母之別。高巢鹿之別。飛鳥君。牟禮之別等祖也。つぎに倭比賣命ハ。禰祭伊勢大神宮也。つぎに伊許婆夜和氣王ハ。沙本穴太部之別祖也。つぎに阿邪美都比賣命ハ。嫁稻瀬毘古王。つぎに落別王ハ。小月之山君。三川之衣君之祖也。つぎに五十日帶日子王ハ。春日山君。高志池君。春日部君之祖。つぎに伊登志和氣王ハ。因無子而爲子代。定伊登志部。つぎに石衝別王ハ。羽咋君三尾君之祖。つぎに布多遲能伊理毘賣命ハ。爲倭建命之后。この天皇。沙本毘賣を后と爲たまへるときに。沙本毘賣命の兄。沙本毘古王。その伊呂妹に。夫と兄とハいづれか愛と問バ。兄ぞはしきと答たまひき。ここに沙本毘古王謀けらく。汝まことに我をはしく思ほさバ。吾と汝と天下を治てむとすといひて。すなはち八鹽折の紐刀をつくりて。その妹にさづけて。この小刀をもて。天皇の寢ませらむを刺殺まつれといふ。かれ天皇その謀ことを知しめさずて。その後の御膝を枕きて。御寢坐き。ここにその後紐小刀もて。その天皇御頸を刺まつらむとして。三度まで擧たまひしかども。不忍にかなしくおもほして。能刺まつらずて。泣たまふ涙御面に散ながれき。

すめらみこと きさき とひ あ いめ さ ほ かた はやさめ  
かれ天 皇おどろきまして。その後に問たまはく。吾ハあやしき夢みたり。沙本の方より。暴雨ふり  
きて。急にはに吾面あがみおもをぬらしつ。又錦またにしきいろなる小蛇へみ。我頸あがみくびになも纏まつへりし。如此かくの夢ハ。何いめのしるし  
にかあらましととひたまひき。ここにその後きさき争あらそハえじとおもほして。まをしたまはく。妾あがみお兄  
沙本毘古王さほびこのみこ。妾あれに。夫をと兄いろせとはしきといづれか愛とひと問とふたりき。かく問えおもにハ面がたず不勝いろせてなも。兄はしきぞはしきと  
答つれば。妾あれにあとらへけらく。吾あれと汝みましと天下あめのたを治しらさむ。故かれ天皇おほきみを殺しせまつれといひて。八鹽折やしほ  
の紐ひも小刀がたなをつくりて。妾あれにさづけつ。ここをもて御頸おほみくびを刺さしまつらむとして。三度みたびまで舉ふりしかども。  
たちまちにかなしくなりて。得えさし刺おほみおもまつらずて。泣ぬらつるなみだのおちて。御面おほみおもを治ぬらしつる。  
かならずこのしるしにこそあらめとまをしたまひき。ここに天 皇。吾ハ殆すめらみことほとに欺あむかえ  
つるかもと詔あたまひて。すなはち軍いくさをおこして。沙本毘古王さほびこのみこをとりにつかはすときに。其王そのみこ稲城いなぎを  
つくりて。待 戦まちたたか。このとき沙本毘古命さほひめみこと。その兄いろせを不得おもほしかね忍しりつみかどて。後 門それよりにげいでて。其の稲城いなぎに  
いりましき。このをりしも。その後きさき妊身うつくしたりき。ここに天 皇。その後の。愛うつくしみ重おもみしたまふことも  
みとせ。三年はらましになりぬるに懷妊いとてさへあることを愛かれかなしとおもほしき。故いくさその軍いくさをやすらはしめつつ。  
不急すむやけくも攻せめたまはざりき。かくとどこほれる間に。その妊あひだせりし御子ほらまも。既産みこぬ。故あれましその御子かれをいだ  
して。稲城いなぎの外とに置おきまつりて。天 皇すめらみことにまをさしめたまはく。若もこの御子みこをバ。天皇おほきみの御子みこと思おもほし  
めさバ。治をさめたまへとまをさしめたまひき。ここに天 皇。その兄すめらみことをこそきらひたまへれ。猶なほ后きさきをバ  
愛いとかなしとおもほせりければ。既得それえたまはむの 心みこころ ましき。ここをもて軍士いくさびとのなか。力士ちからびとのはやき  
をえりつどへて。宣のりたまひつらくハ。かの御子みこを取とらむとき。その母王ははみこをもかぞひとりてよ。髪みかみにまれ  
手にまれ。取獲とりえむまにまに。掬つかみてひきいてまつれとのりたまひき。ここに其その后きさきあらかじめ其そのみこ  
ろを知しりたまひて。悉ことごとにその髪みかみを剃そりて。そのみかみもて。頭みかしらを覆おほひ。また玉たまの緒をを腐くたして。手に  
みへまか。さけ。みけし。くた。また。みそ。けせ。かく。まけ。みこ。むだき。き  
三重と纏とし。また酒ちからびともて御衣みおやを腐すなはちして。全みき衣みおやのごと服みり。如此すなはち設みおやそなへて。その御子みこを抱むだきて。城との  
外とにさしいでたまひき。かれその力士ちからびとども。その御子みこをとりまつりて。即すなはちその御祖みおやをとりまつらむ  
と。その御髪みかみをとれば。御髪みかみおのづからおち。その御手みてをとれば。玉たまの緒ををまたえ。その御衣みそをとれ  
バ。御衣みそすなはち破やぶれぬ。ここをもてその御子みこを取とりまつり獲えて。その御祖みおやをバ得えとりまつらざりき。故かれ  
その軍士いくさびとども。かへりまゐる來きてまをしつらく。御髪みかみおのづから落おち。御衣みそまたやぶれ。御手みてにまかせ  
る玉たまの緒をも。絶たえにしかバ。御祖みおやをバ獲えまつらず。御子みこを取とり獲えまつりつとまをす。ここに天 皇。悔恨すめらみこと  
たまひて。玉たま作くたし人等なを悪くたまして。その地ところをみな奪かれたまひき。故 諺ことわざに。地ところ不得え玉たま作なとぞ  
いふなる。また天 皇。その後すめらみことに詔きさきしめたまはくすべて子この名なハかならず母名ははなをつくるを。この子みこ  
の御名みなをバ何なにとかけむと詔のらしめたまひき。かれ。答みこたへまをしたまはく。今いま稲城いなぎを火燒やりしも。  
火中ほなに生あれませれば。その御名みなハ。本牟智和氣御子ほむちわけのみことぞ稱つけまつるべきとまをさしめたまひき。又また  
かにして日足ひたしまつらむと詔のらしめたまへるに。御母みおもを取とり。大湯おほほゆ坐わかゆ若湯さだめ坐さだめを定さだめて。ひたしまつるべしと  
宣まをしたまひき。故かれその後のまをしたまひのまにまに。ひたしまつりき。又またその後きさきに。汝みましの堅かためし  
美豆みづの能を小佩ひもハ誰たれかも解とかむと問としめたまへバ。たにはひこたすみちのうしのみこ。みむすめ。な  
え。ひ。め。お。と。ひ。め。ふたはしらのひめみこ。おほみたから  
兄し比賣その弟さほびこの比賣みこ。この二とり女いろも王したがぞ。きよき公 民かにませバ。つかひたまふべしとまをさしめたまひ  
き。然あれありてつひに其沙本毘古王ほむちわけのみこを殺ころたまへるに。その伊呂妹いりもも從したがひたまひき。故かれその御子みこを率あて  
あそべるさまハ。尾張をはりの相津あひづなる。二ふたまたすぎ侯ふたまたを相ぶねを。二もちのぼ侯き小舟やまとにつくりて。持いちし上もちり來もちて。倭やまとの市師いちし  
の池いけ輕いけの池うかに浮みべて。その御子みこを率あてあそびき。しかるにこの御子みこ。八拳鬚やつかひげむな心前なにいたるまで。  
眞事まこと登波受はす。かれここに高たかゆたづくね音あを聞あして。はじめて阿藝登比爲あぎとひしたまひき。かれ山邊やまのべの大鶴おほたか  
をつかはして。その鳥とりを取とらしめき。故かれこの人ひと。その鶴たづを追おひたづねて。本國きのくにより針間國はりまのくににいたり。また  
追おひて稲羽國いなばのくにに越こえ。たにはのくにたちまのくに。ひむかし。かた。おひ。あふみのくにに  
追おひて稲羽國いなばのくにに越こえ。すなはち旦波國ふたはしらのくに多遲麻國おほみたからにいたり。東あの方あに追おひめぐりて。近淡國ちかたのくににいたり。  
すなはち三野國みぬのくにに越こえ。尾張國をはりのくによりつたひて。科野國しなぬのくにに追おひつひに高志國こしのくにに追おひいたりて。和那美わなみの



みなと あみ はり とり とり もちのぼ たてまつり かれ みなと わ な み みなと また  
水門に網を張。その鳥を取て。持上りて 獻 き。故その水門を和那美の水門とはいふなり。亦そ  
の鳥を見たまへば。物言むと思ほして。思ほすがごと言たまふことなかりき。ここに天 皇うれひた  
まひて。御寝ませるときに。御夢にさとしたまはく。我宮を。天皇の御舎のごと修理たまはば。御  
子かならず眞事登波牟如此さとしたまふときに。布斗摩邇邇ト相て。何の神の心 ぞと求  
るに。その崇ハ。出雲大神の御心なりき。故その御子をして。その大神の宮を 拝 しめに遣  
たまはむとするときに。誰を副しめば吉むとうらなふに。曙立王トにあへり。かれ曙立王に科せ  
て。宇氣比まをさしむらく。この大神を 拝 によりて。誠しるしあらば。この鷺巢の池の樹に住る鷺  
や。宇氣比落よ。かくのりたまふときに。その鷺地におちて死き。また宇氣比活よとのりたまへば。  
さらに活ぬ。また甜白禱の祈なる葉廣熊白禱を。宇氣比枯し。また宇氣比生しき。かれその  
曙立王に。倭者師木登美豊朝倉曙立王といふ名をたまひき。すなはち曙立王菟上王二王を。  
その御子に副てつかはすときに。那良戸よりハ。跛 盲 遇 む。大坂戸よりも。跛 盲 遇 む。唯木戸  
ぞ腋月之吉戸とトへて。いてゆかすときに。いたります地毎に。品運部を 定 き。かれ出雲  
にいたりまして。大神を 拝 訖て。かへりのぼりますときに。肥河の中に。黒ぎの櫓橋をつくり。  
假宮をつかへまつりてまさしめき。ここに出雲國の 造 の祖。名ハ岐比佐都美。青葉の山をかざり  
て。その河下に立て。大御食たてまつらむとするときに。その御子の詔たまひつらく。この  
河下に。青葉の山なせるハ。山と見えて山にハあらず。もし出雲の石硯の曾の宮に坐。葦原  
色許男神を以伊都玖祝が大延かと。問たまひき。かれ御伴につかはさえたる王等。聞  
よろこび見よろこびて。御子をバ。檳榔の長穗宮に坐まつりて。驛 使をたてまつりき。ここに  
その御子。一宿肥長比賣に 婚 ましき。かれその美人をかきまみたまへば蛇なりき。すな  
はち見かしこみて。にげたまひき。ここにその肥長比賣患たまて。海原をてらして。船よ  
り追來れば。ますます見かしこみて。山の多和よりより。御船ひきこして。にげのぼりい  
でましつ。ここにかへりことまをさく。大神を 拝 たまへるによりて。大御子物詔たまへ  
るがゆゑに。參のぼり來つとまをす。故天 皇よろこばして。すなはち菟上王をかへて。神  
の宮をつくらしめたまひき。ここに天 皇。その御子によりて。鳥取部鳥甘部品運部。大湯坐  
若湯坐を定たまひき。又かの後のまをしたまひのまにまに。美知能宇斯王の女 等。  
比婆須比賣命。つぎに弟比賣命。つぎに歌疑比賣命。つぎに圓野比賣命あはせて四柱を喚上  
たまひき。しかるに比婆須比賣命弟比賣命二柱をとどめて。その弟王二柱ハ。いと醜か  
りしによりて。本つ土に返しおくりたまひき。ここに圓野比賣。同じき兄弟の中に。姿 醜  
によりて。被還ること。隣里にきこえむ。甚はづかしといひて。山代國の相樂にいたり  
ませるときに。樹の枝に取懸て。死むとぞしたまひける。故其地の號を。懸木といひしを。今  
ハ相樂といふなり。まな弟國にいたりませるときに。つひにふかき淵に隨いりてぞ死たま  
ひぬる。かれ其地の號を。隨國といひしを。今ハ弟國といふなり。またこの天 皇。三宅  
の連等が祖。名ハ多遲麻毛理を。常世の國につかはして。登岐土玖能迦玖能木の實を求  
しめたまひき。かれ多遲麻毛理つひにその國にいたりて。その木の實をとりて。縷八縷矛  
八矛をもちてまゐ來つるあひだに。天 皇ハ既 崩 ましぬ。ここに多遲麻毛理。縷四縷矛四矛を  
分て。大后にたてまつり。縷四縷矛四矛を。天 皇の御陵の戸に 獻 置て。その木の實をささげ  
て。叫びおらびて。常世國の登岐土玖能迦玖能木の實をもちて參上りて 侍 とまをして。  
つひに叫哭死き。その登岐土玖能迦玖能木の實といふハ。今の 橘 なり。この天 皇。御年  
百五十三。御陵ハ菅原の御立野の中にあり。又その大后比婆須比賣命のとき。石祝作を定  
たまひ。又土師部を定たまひき。この后ハ。狹木の寺間の 陵 に葬まつりき。

十二 景行天皇

おほたらしひこおしるわけのすめらみこと まきむくの ひしろのみや まし あめのした すめらみこと きびのおみ  
大帯日子淤斯呂和氣天皇。纏向之日代宮に坐して。天下しろしめしき。この天皇。吉備臣  
等が祖。若建吉備津日子の女。名ハ針間の伊那毘能大郎女に娶まして。生ませる御子。  
くしつぬわけのみこ 櫛角別王。つぎに大碓命。つぎに小碓命。またの名ハ倭男具那命。つぎに倭根子命。つぎに  
かむくしのみこ 神櫛王五。また八尺入日子命の女。八坂之入日賣命に娶まして。生ませる御子。若帶日子命。  
いほきのいりびこのみこと つぎに五百木之入日子命。つぎに押別命。つぎに五百木之入日賣命。またの妾の子。  
とよとわけのみこと 豊戸別王。つぎに沼代郎女。またの妾の子。沼名木郎女。つぎに香余理比賣命。つぎに若木之  
いりひこのみこ 入日子王。つぎに吉備之兄日子王。つぎに高木比賣命。つぎに弟比賣命。また日向の  
みはかしづめ 美波迦斯毘賣をめてして生ませる御子。豊國別王。また伊那毘能大郎女の弟。伊那毘能若郎女を  
うみ めて。生ませる御子。眞若王。つぎに日子人之大兄王。また。倭建命の曾孫。名ハ須賣伊呂  
おほなかつこのみこ 大中日子王の女。訶具漏比賣をめてして。生ませる御子。大枝王。すべてこの大帯日子天 皇の  
みこたち 御子等。録にしるせる廿一王。しるさざる五十九王。并八十王ませる中に。若帶日子命と  
やまとたてのみこと 倭建命。また五百木之入日子命と。この三王ぞ。太子とまをす名を負して。それより餘  
なそまりなはしらのみこ 七十七王たちハ。ことごとくに國國の國の造。また和氣稻置縣主に別たまひき。かれ若帶  
ひこのみこと 日子命ハ。天下しろしめしき。小碓命ハ。西東の荒ぶる神。不伏人どもをことむけたまひき。  
くしつぬわけのみこ つぎに櫛角別王ハ茨田下連等之祖。つぎに大碓命ハ守君。オホタノキミ シマダノキミノオヤ  
サカベノアビコ 酒部阿比古。宇陀酒部之祖。つぎに豊國別王ハ日向國造之祖。ここに天皇。三野國の造の祖。  
サカベノアビコ 酒部阿比古。宇陀酒部之祖。つぎに豊國別王ハ日向國造之祖。ここに天皇。三野國の造の祖。  
かむおほねのみこ 神大根王の女。名ハ兄比賣弟比賣。二孃子。それ容姿よきをきこしめしきだめて。その御子  
おほすのみこと 大碓命をつかはして。喚上たまふ。かれその遣さえたる大碓命。喚上ずて。おのれとみづから  
ふたをとめ その二孃子に婚て。さらに他女人を求て。其孃子とまをしてたてまつりき。ここに天皇。それ  
あだしをみ 他女なることを知しめして。恒に長眼經しめ。また婚もせず。ものおもはしめたまひき。かれそ  
おほすのみこと の大碓命。兄比賣に娶て生ませる御子。押黒之兄日子王此者三野之宇泥須和氣之祖また弟比賣に娶  
うみ て生ませる御子。押黒之弟日子王此者牟宜都君等之祖。この御世に。田部を定たまひ。また東の淡の  
みなと 水門を定たまひ。また膳之大伴部を定たまひ。また倭の屯家を定たまひ。また坂手の池をつく  
つづみ りて。その堤に竹を植しめたまひき。天皇小碓命に詔たまはく。何とかも汝の兄朝夕の  
おほみけ 大御食に參出來ざる。もはら汝泥疑をしへさとせとのりたまひき。かく詔たまひて後。五日といふま  
まゐ で。なほ參出たまはざりき。かれ天 皇小碓命に問たまはく。何汝の兄ひさしく參出來ざる。もし  
とひ まだをしへずありやと問たまへば。すでに泥疑つとまをしたまひき。また如何さまにか泥疑つと詔  
あさけ たまへば。まをしたまはく。朝署に廁に入たりしとき。とらへて掄 批て。その枝をひきかきて。薦に  
つづみ 裏て投うてつとぞまをしたまひける。ここに天皇。その御子の建あらきみこころを惶 まして。詔た  
にし まはく。西の方に熊曾建二人あり。これ不伏无禮人等なり。かれその人等を取とのりたまひ  
つかは て遣しき。この時にあたりて。その御髮額に結せり。ここに小碓命。その姨倭比賣命の  
みそみも 御衣御裳をたまはり。劔を御 懐にいれて幸ましき。かれ熊曾建が家にいたりて見たまへば。その  
いへ 家のほとりに軍三重にかくみ。室をつくりてぞ居ける。ここに 室 樂せむと言動て。食物を設そな  
いへ へたりき。かれそのあたりを遊行て。その樂する日を待たまひき。ここにそのうたげの日になりて。  
ゆは その結せる御髮を童女の髪のごと梳たれ。その姨の御衣御裳を服して。すでに童女のすがたに  
をみ なりて。女人どもの中にまじり立て。その室内にいりましき。ここに熊曾建兄弟二人。その孃子を  
み 見感て。己が中に坐て。さかりにうたげたり。かれその酣臨なるときに。懐 より劔をいだし。熊曾  
ころも が衣の衿を取て。劔もてその胸より刺通したまふ時に。その弟建。見畏て逃出き。すなはちその  
むろ 室の椅の本に追いたりて。その背をとらへ。劔もて。尻より刺通したまひき。ここにその熊曾建まを

しつらく。その刀をな動したまひそ。僕まをすべき言ありとまをす。かれ暫ゆるして。押ふせたまふ。ここにまをしつらく。汝命ハ誰にますぞ。吾ハ纏向の日代宮に坐まして。大八嶋國しろしめす。大帶日子淤斯呂和氣の天皇の御子。名ハ倭男具那王にます。意禮熊曾建二人。不伏無禮ときこしめして。意禮を取殺とのりたまひて遣せりと詔たまひき。ここにその熊曾建。まことに然まさむ。西の方に吾二人を除て。建く強き人なし。しかるに大倭國に。吾二人に益て。建き男ハ坐けり。ここをもて吾御名をたてまつらむ。今より以後倭建御子と稱へまをすべしとまをしき。この事まをし訖つれば。すなはち熟苺のごと振折て。殺たまひき。故其時よりぞ御名を稱て。倭建命とハマをしける。しかして還り上りますときに。山神河神。また穴戸神を。皆言向和して。參上ましき。すなはち出雲國に入まして。その出雲建を殺むとおもほして。いたりましてすなはち結友したまひき。かれひそかに赤構もて。刀につくりなして。御佩して。共に肥河に河洩したまひき。ここに倭建命。河よりまづ上りまして。出雲建が解置る横刀を取佩て。刀易せむと詔たまふ。故のちに出雲建河より上りて。倭建命の刀を佩き。ここに倭建命。いざ刀あハむと詔たまふ。爾おのおのおも其刀を抜とときに。出雲建詐刀を得抜ず。すなはち倭建命その刀を抜て。出雲建を打殺たまひき。かれ御歌よみし曰。やつめさす。いづもたけるが。はけるたち。つづらさハマき。さみなしにあはれ。故如此はらひたひらげて。參上りて。覆こと奏たまひき。ここに天皇また頗て倭建命に。東の方十二道の荒ぶる神。及まつろはぬ人等を言向和平と詔たまひて。吉備臣等が祖。名ハ御鉏友耳建日子を削て。つかはすときに。比比羅木の八尋矛をたまひき。かれ命をうけたまはりて。まかり行ますときに。伊勢の大御神の宮に參まして。神の朝廷ををろがみたまひて。その姨倭比賣命にまをしたまへらくハ。天皇既吾を死とやおもほすらむ。何なれか西の方の悪人どもを撃につかはして。返り參上り來しほど。未經幾時。軍衆どもをもたまはずて。今更に東の方十二道のまつろはぬ人どもを平にハ遣すらむ。これによりておもへば。猶吾既死とおもほしめすなりけりとまをして。患ひ泣てまかります時に。倭比賣命。草那藝の劔を賜ひ。また御囊をたまひて。若急の事あらば。この囊の口を解たまへとなも詔たまひける。かれ尾張國にいたりまして。尾張國の造の祖。美夜受比賣の家にいりましき。すなはち婚むと思ほしかども。亦還り上りたらむ時にこそ婚めとおもほして。期定て。東の國に幸まして。山河の荒ぶる神また不伏人等を。ことごとくに言向和平たまひき。かれここに相模國にいたりませるときに。その國の造。その野に火をなも着たりける。故欺えぬと知めして。かの姨倭比賣命のたまへる囊の口をときあけて見たまへば。その裏に火打ぞありける。ここに先その御刀もて草をかりはらひ。その火打をもちて。火を打いで。向火をつけて。焼退て。還り出まして。その國造どもを皆切ほろぼし。すなはち火をつけて焼たまひき。故其地者。今に焼遣とぞいふ。それより入幸まして。走水の海を渡りますときに。そのわたり神浪を興て。船たゆたひて。得進わたりまさず。ここにその后名ハ弟橘比賣命まをしたまはく。妾御子にかはりて海中に入なむ。御子ハ所遣の政とげてかへりこと奏たまふべしとまをして。海に入まさむとするときに。管疊八重。皮疊八重。絶疊八重を。波の上に敷て。その上に下ましき。ここにその暴浪おのづから伏て。御船得進き。爾その後のうたはせる歌曰。さねさし。さがむのをぬに。もゆるひの。ほなかにたちて。とひしきみはも。かれ七日ありて後に。その後の御櫛。海邊に依たりき。すなはちその櫛をとりて。御陵をつくりて。治め置き。それより入幸て。ことごとくに荒ぶる蝦夷どもを言向。また山河の荒ぶる神どもを平和して。還上ますときに。足柄の坂本にいたりまして。御糧きこしめすところに其坂神。白き鹿に化りて來立き。かれその昨のこりの蒜の片端もて。待打たまひしかば。その目にあたりて。

うちころさ くれ しか たち ねもころになげか あつまはや のり くれ くに  
打殺えたりき。故その坂にのぼり立て。三 敷して。阿豆麻波夜と詔たまひき。故その國  
より越て。甲斐に出て。酒折の宮に坐ましけるとときに。歌ひ曰。にひばり。つくはをす  
ぎて。いくよかねつる。ここにその御火焼の老人。御歌を續て。かがなべて。よにハここ  
のよ。ひにハとをかをとぞ歌ひける。ここをもて其老人をほめて。あづま くに みやつこ  
のよ。ひにハとをかをとぞ歌ひける。ここをもて其老人をほめて。あづま くに みやつこ  
し給ひける。その國より科野國に越まして。科野の坂神を言向て。尾張國に還り來まして。先  
に期おかし美夜受比賣の許に入ましつ。ここに大御食たてまつる時に。その美夜受比賣。大御  
酒盞を捧てたてまつる。ここに美夜受比賣。其意須比の欄に月經のもの著たり。故其を見そなは  
して。御歌よみし曰。ひさかたの。あめのかぐやま。とかまに。さわたるくひ。ひはぼそ。  
たわやがひなを。まかむとハ。あれハすれど。さねむとハ。あれハおもへど。ながけせる。  
おすひのすそに。つきたちにけり。爾美夜受比賣。御歌に答てうたひ曰。たかひかる。  
ひのみこ。やすみしし。わがおほきみ。あらたまの。としがきふれば。あらたまの。つき  
ハきへゆく。うべなうべな。きみまちがたに。わがけせる。おすひのすそに。つきたたな  
むよ。故ここに御合まして。その御刀の草那藝の劔を。その美夜受比賣の許に置く。  
伊服岐能山 神を取に幸行き。ここに詔たまはく。この山 神ハ。徒手に直に取てむとのりたまひて。  
其山にのぼりますときに。山の邊に白き猪逢り。その大さ牛のごとくなりき。かれ言舉して詔たまは  
く。この白き猪に化るものハ。其神の使者にこそあらめ。今不殺とも。還らむときに殺てむとのりた  
まひて。のぼりましき。ここに大氷雨をふらして。倭 建 命を打まどはしまつりき此化 白 猪 者  
ソノカミツカヒモノニハアラステソノカミノサネニソアリケムヲコトアガシタマヘルニヨリテマドハサエタマヘルナリ  
非 其 神 之 使 者 當 其 神 之 正 身 因 言 舉 見 惑 也。故かへりくだりまして。玉倉部の清泉にい  
たりて。息ひ坐るときに。御心稍寤ましき。故その清泉を。居寤の清泉といふ。其處より發して。  
當藝野の上にいたりまししときに。詔たまへるハ。吾ころ恒ハ虚よりも翔り行むとおもひつるを。  
今吾足得あゆまず。當藝斯のかたちになりとぞのりたまひける。故其地を。當藝といふ。其地より。  
差すこし幸行に。甚く疲 ませるによりて。御杖をつかして。稍ややにあゆみましき。故其地を。  
杖衝坂といふ。尾津の前の一松の許にいたりませるに。先に御食せしときに。其地に忘したりし  
御刀。不失て猶ありき。爾御歌よみし曰。をはりに。ただにむかへる。をつのさきなる。  
ひとつまつあせを。ひとつまつ。ひとにありせば。たちはけましを。きぬきせましを。ひ  
とつまつあせを。其地より幸まして。三重村にいたりませるときに。亦吾足。三重の勾なして甚く  
疲 たりと詔たまひき。かれ其地を。三重といふ。其より幸行て。能煩野にいたりませる時に。國思  
はして歌ひ曰。やまとハ。くにのまほろバ。たたなづく。あをかきやま。ごもれる。や  
まとし。うるはし。又歌曰。いのちの。またけむひとハ。たたみこも。へぐりのやまの。  
くまかしがはを。うずにさせ。そのこ。此歌ハ。國思ひ歌なり。又歌ひ曰。はしけやし。  
わぎへのかたよ。くもゐたちくも。此ハ片歌なり。此時御病 甚急になりぬ。ここに御歌曰。  
をとめの。とこのべに。わがおきし。つるぎのたち。そのたちはや。と歌ひ竟てすなはち 崩  
ましぬ。爾驛 使をたてまつりき。ここに倭に坐后等。及御子等もろもろ。下到まして。御陵  
をつくりて。其地的那豆岐田に匍匐 廻て。哭しつ歌ひ曰。なづきの。たのいながら  
に。いながらに。はひもとほろぶ。ところづら。於是八尋白智鳥に化て。天に翔て。濱  
に向て飛行ぬ。かれその後及御子等。其小竹の荊杖に。足躰やぶるれども。その痛をも  
わすれて哭なく 追いでましき。此時の歌曰。あざじぬはら。こしなづく。そらハゆかず。  
あしよゆくな。又其海鹽にいりて。なづみ行まししときの歌曰。うみがゆけバ。こしなづく  
む。おほかはらの。うゑぐさ。うみがハ。いさよふ。又飛て。其磯に居たまへる時の歌曰。  
はまつちどり。はまうおハゆかず。いそづたふ。是四歌ハ。皆その御葬に歌ひたりき。故



その國より。飛翔り行て。河内國の志幾にとどまりましき。故其地に御陵をつくりて。しづまりさしめき。その御陵を。白鳥の御陵とぞいふ。しかれどもまた其地よりさらに天翔りて。飛行ぬ。すべてこの倭建命。國平にめぐりましとき。久米直の祖名ハ七拳脛。いつも膳夫として。從仕まつりき。この倭建命。伊玖米天皇の女。布多遲能伊理毘賣命に娶まして。御子帶中津日子命を生ましき。また其海に入まし弟橋比賣命に娶まして。生ませる御子。若建王。また近淡海の安國の造の祖。意富多牟和氣が女。布多遲比賣をめて。生ませる御子。稻依別王。また吉備臣建日子の妹。大吉備建比賣をめて。生ませる御子。建貝兒王。また山代の玖玖麻毛理比賣をめて。生ませる御子。足鏡別王。またある妻のうめる子。息長田別王。すべてこの倭建命の御子等。あはせて六柱ませり。かれ帶中津日子命ハ。天下しろしめしき。つぎに稻依別王ハ犬上君。建部君等之祖。つぎに建貝兒王ハ讚岐綾君。伊勢之別。登袁之別。麻佐首。官首之別等之祖。足鏡別王ハ鎌倉之別。小津。石代之別。漁田之別祖也。つぎに息長田別王の子。杖俣長日子王。この王の子。飯野眞黒比賣命。つぎに息長眞若中比賣。つぎに弟比賣。かれ上に云る若建王。飯野眞黒比賣に娶て。生ませる御子。須賣伊呂大中日子王。この王。淡海の柴野入杵が女。柴野比賣に娶て。生ませる子。迦具漏比賣命。かれ大帶日子天皇。この迦具漏比賣命を娶て。子大江王を生ましき。この王。庶妹銀王に娶て。生ませる子。大名方王。つぎに大 中比賣命ハ。香坂王忍熊王の御祖也。大帶日子天皇の御年。百三十七。御陵ハ山の邊の道の上にある。

十三 成務天皇

若帶日子天皇。近淡海の志賀の高穴穗宮に坐まして。天下しろしめしき。この天皇。穗積臣らが祖。建忍山垂根の女。名ハ弟財郎女をめて生ませる御子。和訶奴氣王。かれ建内宿禰を大臣としたまひ。大國小國の國の造を定たまひ。また國國の堺。また大縣小縣の縣主を定たまひき。この天皇。御年。九十五。御陵ハ沙紀の多他那美にあり。

十四 仲哀天皇

帶中津日子天皇。穴門の豊浦宮また筑紫の訶志比宮に坐まして。天下しろしめしき。この天皇。大中津比賣命に娶まして。生ませる御子。香坂王。忍熊王。また息長帶比賣命に娶ましき。この大后の生ませる御子。品夜和氣命。つぎに大軛和氣命またの名ハ品陀和氣命。この太子の御名。大軛和氣命と負せるゆゑ。はじめ生ませるときに。御腕に軛なせる穴ありしゆゑに。その御名につけまつりき。ここをもて腹中に坐まして國定たまへりしことしらせたり。この御世に。淡道の屯家を定たまひき。その大后息長帶比賣命ハ。當時神歸たまへりき。かれ天皇筑紫の訶志比宮に坐まして。熊曾國をこむけたまはむとせしときに。天皇御琴をひかして。建内宿禰大臣。沙庭に居て。神の命を請まつりき。ここに大后神歸して。言をしへさとしたまひつらくハ。西の方に國あり。金銀をはじめて。目のかがやく種種の寶。その國に多なるを。吾今その國を歸たまはむとのりたまひき。ここに天皇答へまをしたまはく。たかきところののぼりて。西の方を見れば。國ハ見えず。ただ大海のみこそ有とまをして。詐せず神とおもほして。御琴を押退て。ひきたまはず。黙ましぬ。かれ其神大いからして。おほかた茲天下ハ。汝ハ一道にむかひませと詔たまひき。ここに建内宿禰大臣まをしけらく。恐吾天皇。なほその大御琴あそばせとまをしき。爾稍その御琴をとりよせて。なまなまにひきいませしけるに。未幾久て。御琴の音きこえずなりぬ。即火を擧て見まつれば。既崩ましにき。かれおどろきかしこみて。殯の宮に坐まつりて。更に國の大奴佐をとりて。生剥逆剥。阿離溝埋屎戸。上通下通婚。馬婚牛婚。鶏婚犬婚の罪の類をくさぐさ求て。國の大祓して。また建内宿禰沙庭に居



て。神の命を請まつりき。ここに教さとしたまふ状。つぶさに先のごとくにて。おほか  
た此國ハ。汝命の御腹に坐御子の所知國なりとをしへさとしたまひき。かれ建内宿禰。恐我  
大神。其神の腹に坐御子ハ。何の子ぞもとまをせば。男子ぞと詔たまひき。かれ具に請まつりけ  
らく。今かく言教たまふ大神ハ。その御名をしらまくほしとまをせば。答たまひつらく。是ハ  
天照大神の御こころなり。また底筒男中筒男上筒男。三柱の大神なり。此時其三柱大神之  
御名者顯也。今まことに其國を求めむとおもほさバ。天神地祇。また山の神海河の神たちに。  
ことごとに幣帛たてまつり。我御魂を船の上に乗せて。眞木の灰を瓠にいれ。また箸と比羅傳を多  
につくりて。みなみな大海にちらしうけて。度りますべしとのりたまひき。故つぶさに教覺  
たまへるごとくして。軍をととのへ。船を雙て。わたりいでますときに。海原の魚ども。大  
なる小き。ことごとに御船を負てわたりき。ここに順風さかりにふきて。御船浪のまにまにゆき  
つ。故その御船の波。新羅國に押あがりて。すでに國平までいたりき。ここにその國主畏惶てま  
をしけらく。今より以後。天皇の命のまにまに。御馬甘として。毎年船雙て。船腹乾ず。楫舳ほさ  
ず。天地の與共。無退に仕奉むとまをしき。故こをもちて新羅國をバ。御馬甘と定たまひ。  
百濟國をバ。渡の屯家と定たまひき。ここにその御杖を。新羅國主の門に衝突たまひき。すなは  
ち墨江大神の荒御魂を。國守ます神と。鎮祭て。還わたりましき。故そのまつりごといまだ竟たま  
はざる間に。懷妊産まさむとしつ。即御腹を鎮たまはむために。石をとらして。御裳の腰にまか  
して。筑紫國にわたりきましてぞ。其御子ハ阿禮座ける。またその御裳にまかせりし石ハ。筑紫國  
の伊斗村にもある。また筑紫の末羅縣の玉嶋の里にいたりまして。その河の邊に御食せず時し  
も四月の上旬のころなりしかバ。其河中の磯にまして。御裳の糸をぬきとり。飯粒を餌にして。その  
河の年魚をなも釣しける其河名謂小河。亦其磯名謂勝門比賣也。故四月の上旬のころ。女人ども裳の糸を  
ぬき。以粒を餌にして。年魚釣こと。いまに絶ず。ここに息長帶比賣命。倭に還のぼりますとき  
に。人のこころうたがはしきによりて。喪船を一そなへて。御子とその喪船に載まつりて。先御子  
ハ既崩ましぬと言もらさしめたまひき。如此してのぼりいでますときに。香坂王忍熊王聞て。待取  
むとおもほして。斗賀野にすすみ出で。宇氣比獵したまひき。ここに香坂王。歴木に騰坐てみた  
まふに。大なる怒猪出で。その歴木をほりて。すなはちその香坂王を咋食つ。その弟忍熊王。  
其しわざをも畏まずて。軍をおこし待むかへたまふときに。喪船にむかひて。空船を攻たまはむと  
す。かれその喪船より。軍をおろして戦き。このとき忍熊王ハ。難波の吉師部の祖。伊佐比宿禰  
を軍の將としたまひ。太子の御方にハ。丸邇臣の祖。難波根子の建振熊命をぞ。軍の將とした  
まひける。かれ追退て。山代にいたれるときに。還立て。おのおのもしりぞかずて。相戦き。こ  
こに建振熊命たばかりて。息長帶比賣命ハ。既崩ましぬれば。更に戦べきことなしと云しめ  
て。弓弦を絶て。欺て服ひぬ。ここにその軍の將すでに詐を信て。弓を弭兵をおさめてき。  
ここに頂髪の中より設たる弦をとり出。更に張て。追撃き。かれ逢坂に逃しりぞきて。對立てまた  
戦けるを。追迫やぶりて。ささなみに出でなも。ことごとに其軍を斬ける。ここにその忍熊王。  
伊佐比宿禰と。共に追攻らえて。船にのり海に浮て。歌曰。いざあぎ。ふるくまが。いたておは  
ずハ。にほどりの。あふみのうみに。かづきせなわ。とうたひて。即海にいでりて。共に死たまひぬ。  
かれ建内宿禰命。その太子を率まつりて。禊せむとして。淡海また若狹國を経歴ときに。高志  
のみちのくちの角鹿に。假宮をつくりて坐まつりき。爾其地に坐。伊奢沙和氣大神の命。夜の夢  
に見えて。吾名を。御子の御名に易まくほしとのりたまひき。かれ言禱て。恐白。命のまにまに易  
まつらむとまをしき。亦その神詔たまはく。明日の旦濱にいでますべし。名易の幣たてまつらむと  
のりたまひき。故且て。濱にいでませるときに。鼻毀たる入鹿魚。すでに一浦によれり。ここに

御子。神にまをさしめたまはく。我に御食の魚 給りとまをさしめたまひき。故また其御名を稱て。御食津大神とまをす。またその入鹿魚の鼻の血 鼻かりき。故その浦を血浦といひしを。今ハ都奴賀とぞいふなる。ここに還のぼりませるときに。その御祖息長帯比賣命。待酒を醸て。たてまつらしき。爾その御祖の御歌曰。このみきハ。わがみきならず。くしのかみ。とこよにいます。いはたす。すくなみかみの。かむほぎ。ほぎくるほし。とよほぎ。ほぎもとほし。まつりこし。みきぞ。あさずをせさき。如此歌はして。大御酒たてまつらしき。ここに建内宿禰命。御子の爲に答まつれる歌曰。このみきを。かみけむひとハ。そのつづみ。うすにたてて。うたひつつ。かみけれかも。まひつつ。かみけれかも。このみきの。みきの。あやに。うただぬしささ。此ハ酒樂の歌也。凡この帯中津日子天皇の御年。五十二。御陵ハ河内の惠賀の長江にあり。

十五 應神天皇

品陀和氣命。輕嶋の明宮に坐まして。天下しろしめしき。この天皇。品陀の眞若王の女。三柱の女王に娶ませる。一はしらの名ハ。高木の入日賣命。つぎに中日賣命。つぎに弟日賣命。此女王等之父。品陀眞若王者。五百木之入日子命。娶尾張連之祖。建伊那陀宿禰之女。志理都紀斗賣。生子者也。かれ高木の入り日賣命の御子。額田の大中日子命。つぎに大山守命。つぎに伊奢之眞若命。つぎに妹大原郎女。つぎに高目郎女。中日賣命の御子。木の荒田郎女。つぎに大雀命。つぎに根鳥命。弟日賣命の御子。阿倍郎女。つぎに阿具知能三腹郎女。つぎに木之菟野郎女。つぎに三野郎女。また丸邇の比布禮能意富美の女。名ハ宮主矢河枝比賣を娶て。生ませる御子。宇遲能和紀郎子。つぎに妹八田若郎女。つぎに女鳥王。またその矢河枝比賣の弟袁那辨郎女をめして。生ませる御子。宇遲能若郎女。また昨俣長日子王の女。息長眞若中比賣をめして。生ませる御子。若沼毛二侯王。また櫻井の田部連の祖。嶋垂根の女。糸井比賣をめして。生ませる御子。速總別命。また日向の泉の長比賣をめして。生ませる御子。大羽江王。つぎに小羽江王。つぎに幡日若郎女。また迦具漏比賣をめして。生ませる御子。川原田郎女。つぎに玉郎女。つぎに忍坂の大 中比賣。つぎに登富志郎女。つぎに迦多遲王。また葛城の野伊呂賣をめして。生ませる御子。伊奢能麻和迦王。この天皇の御子等。あはせて二十六王男王に。汝等ハ。兄なる子と弟なる子といづれか愛と問したまひき。天皇所以發是問者。宇遲能和紀郎子。有命治天下之心也。ここに大山守命。兄なる子ぞ愛とまをしたまひき。つぎに大雀命ハ。天皇の問したまふ大御情をしらしてまをしたまはく。兄なる子ハ。すでに人となりつれば。悞ことなきを。弟なる子ハぞ。未成人バ愛とまをしたまひき。ここに天皇詔たまはく。佐邪岐阿藝の言ぞ。我おもほすがごとくなると詔たまひて。すなはち詔別たまへらくハ。大山守命ハ。海山の政をまをしたまへ。大雀命ハ。食國の政執もちてまをしたまへ。宇遲能和紀郎子ハ。天津日繼知所とのりわけたまひき。故大雀命ハ。天皇の命に勿違也。あるとき天皇。淡海國に越幸ますとき。宇遲野の上に御立して。葛野を望まして。歌曰。ちばの。かづぬをみれば。ももちだる。やにはもみゆ。くにのほもみゆ。故木幡村にいたりませるときに。その道衢に麗美嬢子あへり。ここに天皇その嬢子に。汝ハ誰子ぞと問しければ。答まをさく丸邇の比布禮能意富美が女名ハ宮主矢河枝比賣とまをしき。天皇その嬢子に。吾明日還幸むとき。汝の家に入坐むと詔たまひき。かれ矢河枝比賣その父に語り。ここに父が答けらく。是ハ天皇に坐けり。恐し。我子つかへまつれといひて。その家を嚴くかざりて。候待バ。明日入坐ぬ。かれ大御饗をたてまつるときに。その女矢河枝比賣に大御酒盞を取しめてたてまつりき。ここに天皇。その大御酒盞を取しめながら御歌曰。このかにや。いづくのかに。ももづたふ。つぬがのかに。よこさらふ。いづくに

いたる。いちぢしま。みしまにとき。みほどりの。かづきいきづき。しなだゆふ。ささなみぢを。すくす  
 くと。わがいませばや。こはたのみちに。あはししをとめ。うしろでハ。をだてろかも。はなみはし。  
 ひしなす。いちひゐの。わにさのにを。はつにハ。はだあからけみ。しはにハ。にぐるきゆゑ。みつ  
 ぐりの。そのなかつにを。かぶつく。まひにハあてず。まよがきこに。かきたれ。あはしをみな。かも  
 がと。あがみしこに。うただけに。むかひをるかも。いそひをるかも。かくみあひうみ。如此て御合まして生ませる  
 御子ぞ。宇遲能和紀郎子にましける。天皇日向國の諸縣の君の女名ハ髪長比賣。それ顔容よ  
 しときこしめして。使ひたまはむとして。めさげ。ひつぎのみおほささきのみことをとめ。嬢子の  
 難波津に泊たるを見たまひて。その姿容よきに感たまひて。すなはち建内宿禰大臣に詔たまは  
 く。この日向より喚上たまへる髪長比賣をバ。天皇の大御所に請まをして。あれ。たまは。吾に賜しめよとのりた  
 まひき。かれ建内宿禰の大臣大命を請しかバ。天皇すなはち髪長比賣を其御子にたまひき。賜  
 る状ハ。天皇豊明きこしめす日。髪長比賣に大御酒のかしはをとらしめて其太子にたまひき。  
 ここに御歌よみし曰。いざこども。ぬびるつみに。ひるつみに。わがゆくみちの。かぐはし。はなた  
 ちばなハ。ほつえハ。とりゐがらし。しづえハ。ひとりがらし。みつぐりの。なかつえの。ほつもり。  
 あからをとめを。いざささば。よらしな。又御歌曰。みづたまる。よさみのいけの。ぬぐひうち  
 比斯賀良能さしけるしらに。ぬなはくり。はへけくしらに。わがこころし。いやをここに。いまぞく  
 やしき。如此歌はして賜ひき。故その嬢子をたまはりて後に。太子の歌曰。みちのしり。こはだ  
 をとめを。かみのごと。きこえしかども。あひまくらまく。又歌曰。みちのしり。こはだをとめハ。あらそ  
 はず。ねしくをしども。うるはしみおもふ。又吉野の國主等。大雀命の佩せる御刀を瞻て歌曰。  
 ほむだの。ひのみこ。おほささき。はかせるたち。もとつるぎ。すゑふゆ。ふゆきのす。からがしたき  
 の。さやさや。又吉野の白禰上に横白をつくりて。その横白に大御酒を醸て。その大御酒をたてま  
 つるときに。口鼓をうち伎をなして。歌曰。かしのふに。よくすをつくり。よくすに。かみしおほみ  
 き。うまらに。きこしもちをせ。まろがち。此歌ハ。國主等大贅たてまつる時つねに。今にいたる  
 までうたふ歌なり。この御世に海部山部山守部伊勢部を定たまふ。また劔の池をつくる。また  
 新羅人參わたり來つ。ここをもて建内宿禰命引率て堤池に役せて。百濟の池をつくる。また  
 百濟國主照古王。牡馬壹疋牝馬壹疋を。阿知吉師に付てたてまつりき此阿知吉師者。阿直史等之祖。  
 また横刀と大鏡とをたてまつりき。また百濟國に。若賢人あらバたてまつれと科たまふ。かれ命  
 をうけてたてまつれる人名ハ和邇吉師。すなはち論語十卷千字文一卷あはせて十一卷を。是人  
 につけてたてまつりき此和邇吉師者。文首等祖。また上手人韓鍛名ハ卓素。また呉服とり西素  
 二人をたてまつりき。また秦造の祖漢直の祖。また酒を醸ことを知る人名ハ仁番また  
 の名ハ須須許理等。參わたり來つ。かれこの須須許理。大御酒を醸てたてまつりき。ここに天皇  
 このたてまつれる大御酒にうらげて御歌曰。すすこりがかみしみに。われゑひにけり。ことなぐ  
 し。ゑぐしに。われゑひにけり。如此歌はしつ幸行る時に。御杖もちて大坂の道の中なる大石  
 を打たまひしかバ。その石走避ぬ。かれ諺に堅石も醉人を避るとぞいふなる。故天皇崩  
 まして後に。大雀命ハ。從之天皇のまにまに。天下を宇遲能和紀郎子にゆづりたまひき。ここ  
 に大山守命ハ。天皇命にたがひて。猶天下を獲むとして。その弟皇子を殺むのころありて。竊  
 に兵將を設て攻むとしたまひき。ここに大雀命。その兄の兵を備たまふことを聞して。すなは  
 ち使を遣て。宇遲能和紀郎子に告しめたまひき。かれ聞おどろかして。いくさびとを河の邊に伏  
 し。亦その山の上に。絶垣を張帷幕を立て。いつはりて舍人を王に爲て。あらはに呉床に坐て。  
 百官敬び往來狀。すでに王子の坐所の如して。さらに其兄王の河をわたりまさむ時のために。  
 船楫をそなへかざり。また佐那葛の根をうすに春。その汁の滑を取て。その船の中の簀椅にゆり

て。踏て仆べく設て。其王子ハ。布の衣はかまを服て。すでに賤人のかたちになりて。楫をとりて  
船に立ませり。ここに其兄王。兵士をかくし。鎧を衣のうちに服て。河の邊にいたりて。船に乗まき  
むとする時に。其 嚴くかざれるところを望て。弟王をその呉床に坐とおもほして。楫をとりて船に  
立ませることをバかつて知らずて。すなはち其楫とれる者に問たまはく。この山に怒る大猪ありと傳  
に聞り。吾その猪を取むとおもふを。若その猪獲てむやと問たまへば。楫とれる者。獲得た  
まはじと答バ。また何なればと問たまへば。時時ところどころにして取むとすれども獲得ず。ここ  
をもて能得たまはじとまをすなりといひき。渡りて河中にいたれる時に。其船を傾しめて。水の中  
におとしいれき。ここに乃 浮出て。水の 隨 流くだりたまひき。即 流つつ歌ひ 曰。ちはやぶ  
る。うちのわたりに。さをとりに。はやけむひとし。わがもここにこむ。於是河の邊に伏隠たる兵びと。  
彼廂此廂もろともにおこりて。矢刺て流き。かれ訶和羅の前にいたりて沈入たまひぬ。故鈎をも  
ちて其しづみたまひし處を探しかば。その衣のうちなる甲にかかりて。訶和羅と鳴き。かれ其地の  
號を訶和羅の前とハ謂なり。ここに其骨をかきいだせるときに。弟王の歌曰。ちはやひと。うちの  
わたりに。わたりぜに。たてる。あづさゆみ。まゆみ。いきらむと。こころはもへど。いとらむと。こころ  
はもへど。もとへハ。きみをおもひで。すゑへハ。いもをおもひで。いらなけく。そこにおもひで。か  
なしげく。ここにおもひで。いきらずぞくる。あづさゆみ。まゆみ。故其大山守命の骨をバ。  
那良山に葬き。此大山守命ハ土形君。弊岐君。榛原君等之祖。ここに大雀命と宇遲能和紀郎子と  
二柱。天下を各讓たまふ間に。海人ハ大贅をたてまつりき。爾兄ハ辭て弟にたてまつらしめ  
たまひ。弟ハまた兄にたてまつらしめて相讓たまふ間に。すでに多日經ぬ。如此相讓たま  
ふこと一たび二たびにあらざりければ。海人ハすでに往還につかれて泣けり。故諺に。海人なれ  
や己が物から泣とぞいふ。しかるに宇遲能和紀郎子ハ。早く崩ましぬ。かれ大雀命ぞ天下し  
ろしめしける。又昔新羅國主の子。名ハ天之日矛と謂あり。この人參渡來けり。參わたりけるゆゑ  
ハ。新羅國に一の沼あり。名を阿具奴摩といふ。この沼のほとりに。一賤の女晝寝したりき。ここに  
日の耀虹の如その陰上を指たるを。また一賤の男。その状をあやしとおもひて。恒にその女人の  
行ひをうかがひけり。故この女人。その晝寝したりしときより妊身て。赤玉をなも生ける。ここにその  
うかがへしづを。そのたまを乞とりて。つね つつみ こし。ひとたにへた。たをつくれりければ。  
伺る賤の夫。其玉を乞とりて。恒ハ裏て腰につけたりき。この人山谷間に田をつくれりければ。  
耕人等の飲食を牛に負て。山谷の中に入れる。その國主の子天之日矛逢り。かれ其人に問けら  
く。何汝飲食を牛に負て。山谷へハ入ぞ。汝かならずこの牛をころして食ならむといひて。すな  
はち其人をとらへて。獄囚にいれむとすれば。其人答けらく。吾牛を殺むとにはあらず。唯田人  
の食ものを送るにこそあれといふ。しかれども猶赦ざりければ。その腰なる玉を解て。その國主の  
子に幣つ。故その賤の夫ゆるして。其玉をもち來て。床の邊に置りしかば。すなはちかほよき嬢子  
になりぬ。仍 婚して嫡妻としたりき。ここにその嬢子。常にくさぐさの珍味を設て。いつも  
いつも其夫にすすめき。故その國主の子こころ奢て妻を冒バ。その女人。おほかた吾ハ。汝の  
妻になるべき女にあらず。吾祖の國に行とすといひて。しぬひて小船にのりて。逃わたり來て  
難波になもどまりける。此者坐難波之比賣曾社。謂阿加流比賣神者也。ここに天之日矛その妻の遁れこしことを  
きき。おひ き。なには。そのわたり かみさへ いれ。きき。おひ き。なには。そのわたり かみさへ いれ。  
聞て。すなはち追わたり來て。難波にいたらむとするほどに。其渡の神塞て入ざりき。かれさらに  
かへりて。多遲摩國に泊つ。すなはち其國にとどまりて。多遲摩の俣尾が女名ハ前津見に娶て  
生る子多遲摩母呂須玖。此之子多遲摩斐泥。これが子多遲摩比那良岐。これが子多遲摩毛理。  
つぎに多遲摩比多訶。つぎに清日子。此の清日子當摩の咩斐に娶て生る子酢鹿の諸男。つぎ  
に妹管竈由良度美。かれ上にいへる多遲摩比多訶その姪由良度美に娶て生る子葛城の高額  
比賣命此者息長帶比賣命之御祖。かれその天之日矛の持渡り來る物ハ。玉津寶といひて。珠二貫。

また浪振比禮。浪切比禮。風振比禮。風切比禮。また奥津鏡。邊津鏡。あはせて八種なり。此者  
 伊豆志之八前大神也。かれこの神の女名ハ伊豆志袁登賣の神坐り。かれ八十神この  
 伊豆志袁登賣を得むとすれども。みな得婚ず。ここに二神あり。兄を秋山の下氷壯夫と  
 いひ。弟を春山の霞壯夫とぞいひける。故その兄その弟にいひけらくハ。吾伊豆志袁登賣  
 を乞ども。得婚ず。汝この嬢子を得てむやと謂バ。やすく得てむと答曰。ここにその兄の曰。  
 もし汝この嬢子を得てあらバ。上下の衣服を避。身の高をはかりて甕に酒を醸。また山河の物ら  
 ことごとそなへ設て。宇禮豆玖をこそせめといふ。ここに其弟。兄の言る如つぶさに其母にま  
 をせば。すなはちその母。ふち葛を取て。一宿の間に。衣禪襪沓まで織縫。また弓矢をつ  
 くりて。そのきぬはかまを服。その弓矢をとらせて。その嬢子の家に遣しかバ。その衣服も弓矢も。  
 ことごと藤の花とぞなれりける。ここにその春山の霞壯夫。その弓矢を嬢子の廁にかけたるを。  
 伊豆志袁登賣その花をあやしとおもひて。將來るときに。その嬢子の後に立て其屋に入て。  
 すなはち婚しつ。故子ひとり生たりき。ここに其兄に。わいづしをとめえ。吾ハ伊豆志袁登賣を得たりといふ。こ  
 こに其兄ハ。弟の婚つることを慷慨て。其宇禮豆玖ものを償ず。爾その母に愁まをすときに。  
 御祖の答曰。我御世の事。能許曾神習め。また宇都志岐青人草ならへや。その物償はぬといひ  
 て。その兄なる子をうらみて。すなはちその伊豆志河の河嶋の節竹をとりて。八目荒籠をつくり。そ  
 の河の石をとり。鹽に合て。その竹の葉につつみ。詛言しめけらく。この竹葉の青むが如。この  
 竹葉の萎がごと。青み萎め。またこの鹽の盈乾がごと。盈乾よ。またこの石の沈がごと。しづみ  
 臥せ。かく詛て烟の上に置しめき。ここをもて其兄八年の間干き萎病枯き。故その兄うれひ泣  
 て。その御祖に請バ。すなはち其詛戸を返しめき。ここに其身本の如に安平き此者神  
 宇禮豆玖之言本者也。又この品陀天皇の御子。若野毛二侯王。其母の弟百師木伊呂辨。又の名ハ  
 弟日賣眞若比賣命に娶て生ませる子大郎子。またの名ハ意富富杼王。次に忍坂の  
 大中津比賣命。次に田井之中比賣。次に田宮之中比賣。次に藤原之琴節郎女。次に沙禰王  
 柱。故意富富杼王ハ三國君。波多君。息長君。坂田酒人君。山道君。筑紫之米多君。布勢君等之祖也。また  
 根鳥王庶妹三腹郎女に娶て生ませる子中日子王。次に伊和嶋王。また堅石王の子ハ。  
 久奴王なり。すべて此品陀天皇。御年百三十。御陵ハ川内の惠賀の裳伏の岡にあり。